

## 書 評

上杉和央 著

『軍港都市の一五〇年 横須賀・呉・佐世保・舞鶴』

吉川弘文館 2021年10月 296頁 1,900円+税

近年、軍都研究が盛んであるが、本書は『軍港都市史研究Ⅱ 景観編』（清文堂、2012年）を編集し、軍港都市研究の一翼を担ってきた著者によって書かれたものである。著者はプロローグにおいて軍港都市の個性をいくつかの側面に分けて描くと述べ、とりわけ「どのような都市が形成されたのか」「どのような人びとが集まったのか」「どのような町として表現されたのか」という3つの視点を意識した軍港都市史であると言う。さらにその視点は、他の都市研究にも適応でき、特別な見方ではないと述べるが、2つ目、3つ目の視点については、生産の視点を重視する経済史からは、かなり異色と思われるのではないかと。著者は研究の軸足を「軍港・都市」の后者の都市に置き、都市空間の「場」の中で「生活する人々」を捉えようとするアプローチを探る。プロローグの最後の方にある「本書の関心は海軍ではなく、都市にある…」(4頁)という一文が、本書の核心をついている。プロローグとエピローグを除いた目次は、以下の通りである。

### 軍港都市の成立

軍港都市という位置づけ

軍港都市の起源

### 軍港都市に住まう人びと 横須賀の都市社会

人口・戸数の変化からみる横須賀の50年

横須賀の「紳士」

賑わう社会

都市のまなざし

### 軍港都市と観光 戦前の舞鶴

軍港都市舞鶴の地域資源

要港部時代の舞鶴の原風景

吉田初三郎、軍港都市を描く

吉田初三郎の鳥瞰図

舞鶴—1924年

横須賀—1930年

呉—1935年

軍港都市から平和産業港湾都市へ 呉の転換

軍港都市呉の建設と発展

市街地の戦後復興の基盤

平和産業港湾都市をめざして

れんが色の街 呉と舞鶴の都市整備

戦後の市街地整備

「れんが」調のまちづくり— 呉

大和ミュージアム建設と赤煉瓦

舞鶴の赤れんが

海軍ゆかりの街—軍港都市の現在

「軍港都市の成立」では、近代に人口が増加した都市を検討し、増加したのは海と関わる都市が顕著であり、軍港都市は、その典型であると指摘した。評者も近代都市を考える場合、海の視点はもちろんのこと船の視点は不可欠であり、さらに言えば「石炭の視点」を考慮すべきであると思う。船舶だけでなく工業用動力源であった重い石炭は、軍港都市を含め港湾都市形成に大きな影響を与えたと考えている。ついで軍港都市の成立の起源や形成過程がまとめられており、軍港都市の基本的知識が解説される。

「軍港に住まう人びと 横須賀の都市社会」では、横須賀軍港の都市形成期の生活者にスポットを当てる。まず、開港から50年間の急激な都市化や転入人口などを検討し、1871(明治4)年の横須賀造船所の建設により農漁村だった横須賀村が大きく変貌し、海軍工廠の企業城下町を形成したとする。さらに居住者分析では、海軍工廠の勤務者が多く、横須賀市に戸籍を置かない寄留者が市の人口の半分以上を占め、その6割以上が男性であったことを明らかにした。また、尋常小学校の生徒数が、高学年になればなるほど減少するというデータをもとに、当時の移動の激しさを推測しているが、この特徴は、戦後になっても継続したように思う。さらに、著者は『日本紳士録』を利用し、富裕層の動向を分析している。その結果、横須賀地区の3町村では、横須賀町の商人の高額納税者が増加し、南の豊島村では富裕層に軍人関係が目立ち、浦賀町では回船業や銀行経営者が高額納税者であったことを明らかにしている。

次に、生活者の実態を捉えるため『横須賀繁昌記』(1888年)などの書物を見出し、作品分析をベースに横須賀の軍港都市社会における人々の生活実態を探る。造船所の進水式をはじめ、料理屋の評判、遊郭など庶民生活の風景が取り上げられている。とりわけ遊郭については詳しく、娼妓の数や出身地、年齢構成、さらに娼妓が作った歌まで記載されているが、その歌についても編纂者の男性まなざしによるもので、作品に見えた横須賀は、「表も裏も描かれているようで……裏側の色付けは表側から染み込ませたもので」、「そうした技法で塗りこめられた都市」であったと述べ、この章の最後の一文(86頁)は、都市形成過程におけるある種の陰陽のイメージを示唆するものとして、評者に強烈なインパクトを与えた。

「軍港都市と観光 戦前の舞鶴」では、1901(明治34)年に4つ目の海軍鎮守府が置かれた舞鶴(厳密には新舞鶴、中舞鶴)を例として、軍港都市と観光の関わりを検討している。北海道を除く主要城下町が陸軍の軍都になったのとは異なり、辺鄙な海岸地域に計画都市として、にわかには建設された軍港都市は、そもそも神社仏閣などの観光資源に乏しく、その遺産に欠ける。舞鶴の場合は、海軍鎮守府や工場などの軍関係施設はもちろんのこと、都市そのものが観光に結び付けられていたと著者が指摘している。評者は、市街地の基軸となるストリートに「三笠通り」「初瀬通り」「朝日通り」「敷島通り」など主力艦船の名称が付けられていることに驚く。鎮守府設置から都市整備が行われたのが、緊迫した軍事状況の時期であったのではと思う。その後、第一次世界大戦後の軍縮会議の影響で、海軍鎮守府が要港部に、海軍工場は工作部に格下げされた。格下げによる苦境の打開のため舞鶴では町起しの起爆剤として博覧会を実施し、これに海軍も協力した。併せてその広告の媒体となる「絵葉書」が多数制作された。著者はこの絵葉書に着目し、その背景にある製作意図を探り、軍港や兵器、あるいは軍港都市そのものの観光資源化が進んだとしている。

「吉田初三郎、軍港都市を描く」では、著者の3つの視点のうち、軍港都市は「どのような町として表現されたのか」を検証している。町(都市)を表現するといえは、一般的には地図が用いられ、とりわけ、等高線や地図記号など統一的な

基準によって製作された地形図が全国を覆っているなか、著者が注目したのは地形図ではなく、吉田初三郎制作の鳥瞰図であった。地形図は、戦前には国家の意図が入ったものの、機械的な正確さが求められるのに対して、鳥瞰図は、絵図で国家の意図のみならず、製作者の意図もストレートに表われる。その意図は時代時代の世相にも反映しており、著者の視点からの軍港都市分析に鳥瞰図を用いたことは、的を射た方法と言える。著者は、吉田の描いた鳥瞰図の製作順に解説するが、ここでは軍港都市の核となる海軍施設やそれを取り巻く市街地の描き方や記述に注目したい。

1924(大正13)年に刊行の『舞鶴図絵』では、舞鶴、新舞鶴、中舞鶴の3つの町が中心に描かれ、後ろの2つが軍港都市である。長方形ブロックの整然とした街並みの新舞鶴町、艦船の停泊する軍港や工場が描かれた中舞鶴町であるが、不気味なほど注記がない。著者も「積極的もしくは意図的に文字注記がされていない」(129頁)としたが、2.5万分の1地形図には、海軍関係の施設が記載され、海軍関係施設の見学なども行われていることから、この時期の「軍施設が完全に秘匿」(132頁)との見方には疑問を呈している。

これに対して横須賀などを描いた鳥瞰図の『湘南』(1930年)では、一転して横須賀を「海軍の町」の視点から、海軍を可視化するために描かれたのではないかと著者が推察するほど、海軍工場など多くの施設名が記入されており、『舞鶴図絵』とは逆である。著者は、この変化の背景にはワシントン海軍軍縮条約を受けた海軍省の対応があったのではと推測するとともに、鳥瞰図が刊行された1930(昭和5)年は、横須賀で「日本海海戦25周年記念」の博覧会が開催され、海軍の町横須賀のアピールがあったことを指摘した。

次に取り上げられたのは、第二海軍区鎮守府が置かれた呉であり、使用された鳥瞰図は、呉線が全通となる三原-呉間の三呉線の開通を記念して刊行された『三呉線図絵』(1935年)である。この図について著者は、左右で描き方が大きく異なることを指摘しているが、確かに呉の中心市街地が非常に大きく描かれているのに対して、呉湾の東の細長く延びる海軍工場など最重要の軍事地区が、山地で見えないようブロックして隠されている。また、吉田が呉を描いた鳥瞰図には、1932

(昭和7)年制作のものもあるが、呉湾東の軍事地区はやはり隠されて描かれていない。このことについて、著者は再び軍事力の強化へと政府が舵を切る中、表現への規制が強化される状況下の製作であったと指摘した。1枚の鳥瞰図から、その描き方や表現の違いの背景にある軍事力の強化などの政治状況の変化を読み取っており、著者のこういった手法は、注目に値する。差し迫る戦争への道を鳥瞰図の描き方の変化が暗示していることを、本書は我々に教えてくれる。

「軍港都市から平和産業港湾都市へ 呉の転換」では、軍港都市の呉を事例に、戦前の軍事地帯の海岸部と内陸の市街地という空間的な二重構造が、戦後の復興の中で、どのように捉えられ、実際どうなったのかを検証している。敗戦直前の呉は、アメリカ空軍の大空襲によって壊滅状態となり、敗戦とともに帝国海軍は消滅した。呉の復興は、旧海軍施設の民間への転用であり、著者の言う「連続性」を強めていくことであった。これを意図したのが1950(昭和25)年に施行した「旧軍港市転換法」であり、新しい都市の建設ではなく、旧軍港施設を「転換」することで、新たな都市像の獲得を目指した。そのバックボーンにあったものは、著者も指摘しているが蓄積された呉海軍工廠の技術力の高さにあったように評者も思う。「転換」には様々な思惑が込められていた。空襲で破壊された旧海軍工廠の巨大なドックは、1951(昭和26)年にアメリカ資本のNBC呉造船部となり、翌1952年には当時の世界最大のタンカーを、さらに1950年代後半には、世界最大という名称が付くタンカーを続々と建造した。評者は小学校時代に巨大なタンカーの進水式に参加し、その大きさに驚いたことがある。図42には戦後の復興した呉の工業地帯が描かれており、確かに著者の言う空間的な「連続性」が強化されたと言える。ただ、戦前の海軍工廠跡地に、戦後も同じような業種の企業が立地しており、「官」から「民」へと転換は果たしたものの、工業の質的な変換は進まなかったとも言える。

また、敗戦によって帝国海軍は消失したが、代わってアメリカ軍、さらに英連邦軍が駐留、その司令部は旧海軍の中核の鎮守府に置かれた。軍隊の町という「連続性」が続くなか、平和産業港湾都市を目指した「旧軍港都市転換法」の公布直前

に、朝鮮戦争が勃発(1950年)した。平和産業港湾都市への道は遠のき、1952(昭和27)年には海上保安庁警備隊が発足、1954年には海上自衛隊となった。駐留軍に引き続き、旧海軍鎮守府の庁舎は、海上自衛隊の庁舎として使用された。軍港都市、海軍の町という「連続性」は明確であり、近年の呉観光の目玉になっている大和ミュージアム(呉市海事歴史科学館)にもつながる。著者の言う「二つの要素がそれぞれ変わりつつも連続するという、ある意味で絶妙な「転換」が起こった…」(205頁)とは、歴史の脈絡を突く実に興味深い指摘と言える。

「れんが色の街 呉と舞鶴の都市整備」では、旧軍港都市の「れんが色」について、市街地整備と重ね合わせて検討している。だが、呉で生まれ育った評者には、れんが色の都市というイメージはない。赤煉瓦が見られるようになるのは、1980年代からで、呉の中心市街地には、著者も「赤煉瓦建造物は皆無とあってよい」(213頁)とするが、全くその通りである。呉の色と言えば造船所の「赤茶けたサビ色」を思い浮かべる。れんが色が目立つようになったのは、そんなに古いことではない。ただ、市街地と断絶した海岸部の中に“赤煉瓦”の旧海軍鎮守府庁舎があった。

著者は海軍カラーとも言える「赤れんが」に着目して、それがいかに利用されていくか検討する。その結果、呉の市街地に「れんが色」が拡大するきっかけになったのは、呉の中央商店街である「中通り」(別称:れんがどおり)の舗装工事であったことを明らかにした。当時、呉-広島間の交通手段が改善されればされるほど広島への消費流失が拡大し、また、呉駅周辺への大型商業施設の出店が噂されるなか、中通りは、その中心性を高めるため、赤れんが色の舗装化に踏み切った。その結果、近くの通りや図書館、文化ホール、美術館などの公共施設にも次々と「赤れんが色」が使われ、拡大したと言う。さらに著者は呉の観光名所となった大和ミュージアムの建設の経緯を検討し、当初の「大和」と「赤煉瓦」という並列的な組み合わせは消えたという。街の至る所で赤れんが調が利用され、『街のいろはレンガ色』と題した本も出版され、れんが調は「戦前と戦後を連続させる役割」とともに「海岸部の海軍というイメージを内陸の市街地まで広げる役割」を果たし

たとし、「街全体を覆う基調色」(234頁)になったとする。

舞鶴での「赤れんが」の発見と遺産化の動きは、1990(平成2)年前後からであると言う。1991年に始まった「ジャズフェスティバル」の会場や「肉じゃが」が食べられるイベント会場に赤れんが倉庫が使われたが、それは海軍を宣伝したものではなかったとする。だが、2000年代に入ると行政による「赤れんが」の街づくりが進められ、観光戦略の対象に海軍や海上自衛隊が取り込まれた。今日では舞鶴はもちろん旧軍港都市は、ゲーム・アニメの「コンテンツツーリズム」の対象となった。舞鶴は「今や積極的に「海軍」を売り出している」(268頁)と著者は指摘する。

エピローグでは全体がまとめられている。その

中で軍港都市の特徴は、海軍地区と市街地地区を分ける「門」による「断絶性」にあると指摘し、同時に逆の「連続性」も、海軍-海上自衛隊、海軍工廠-造船業などの重工業の中に存在するとしている。本書は、プロローグで述べた3つの視点から断絶、連続という概念を構築し、軍港都市に関して、「生活者」「都市社会」「軍港観光」「絵葉書」「鳥瞰図」「転換」「赤れんが」などのキーワードで多岐にわたるアプローチを行い、論点を展開している。著者が用いた断絶、連続という分析手法は、軍港都市のみならず、基地都市、原発の町といった単一企業都市など、幅広いテーマに適用できよう。本書は、軍港都市の誕生から、その発展過程、さらに未来を見据えた興味深い歴史地理学の成果と言え、広く一読を薦めたい。

(平岡昭利)